

○プロジェクト立ち上げの経緯

- 京都の産業は古いものを守り続けてきたのではなく、常に時代のニーズを踏まえ、新しいことを取り入れてきたからこそ続いている。それは、私達が住む地域にも当てはまる。
- 地域には少子高齢化や空き家問題、地域の担い手の減少等、多くの地域課題・社会課題が存在する。そして、地域は地域住民、企業、大学等多くの構成員で成り立っている。
- 地域の課題に取り組むのは行政や住民だけではない。地域にある様々な課題に対して、地域企業が持続可能な形で貢献する方法を検討することはできないか。これからの社会で求められる「地域課題に対する企業の地域貢献」を考える勉強会を、令和4年度に立ち上げた。

○これまでの経過

- 令和4年度は、地域住民の代表として紫野学区まちづくり協議会の関係者、企業セクターからは地域企業の事業主や担当者、行政セクターからは北区のまちづくりアドバイザー、幅広い世代から10数名の参加者に集まっていただき、5回の勉強会を開催した。
- 勉強会で導き出された今後の方向性が「繋がる接点の創出」、「ふらっと集う・つながる場所づくり」、そして「顔の見える関係性づくり」である。対象地域である紫野学区の中心に位置する船岡山公園を中心として、繋がりや接点となるイベントやサロンのような場作りに取り組んでいきたいという意見で挙がり、次年度の取組テーマとなった。

○船岡山公園について

- 紫野学区には標高112メートルの小丘に船岡山公園があり、地域のシンボリックな存在になっている。自然豊かな公園には、広い広場や遊具があり、頂上まで行くと、京都の街並みがよく見える。



(船岡山公園)

- 一級建築事務所 STUDIO MONAKA と一般社団法人ぼくみん (SOCIAL WORKERS LAB) らが船岡山公園利活用トライアル事業として実施しているのが、「FUNAGORA」である。毎月第3日曜日に、「オープンパーク」という公園びらきのイベントを開催しており、毎回多くの参加者や出店者で賑わっており、より多様な人にひらかれた公園づくりの実験として、価値を生み出してきている。
- ぼくみん (SWLAB) は、西陣・船岡山地域のツアーを開催するなど地域に「まちを消費するのではない、地域への配慮のある仕事や営み」を外部に伝える活動をしている。

○勉強会の様子

- 令和4年度の勉強会で導き出された今後の方向性をもとに、主催者であるFUNAGORA (船岡山公園オープンパーク実行委員会) と協議を重ねた。従来のマルシェイベントに加えて、地域の方を巻き込んだ形でトークイベントを開催することで開かれた場づくりしていくことになった。
- 10/23と12/19の2回に渡り、令和4年度の勉強会参加メンバーに集まっていただき、「令和5年度これからの紫野学区を考える勉強会」を開催した。
- 今年度のテーマは、「交流の場づくりの試行実施」についてである。勉強会の趣旨説明や前年度の振り返りを行った後、今年度の取組事業案である「船岡山公園を活かした、多様な方々が参加できる場づくり」事業案を説明した。

- コンセプトは「誰かに会いに行く公園」。地域をより良くするための協働を促進するために、船岡山公園を起点とした、地域づくり・新たなコミュニティづくりにつながるイベントを企画した。日中のOPEN PARKに加えて、夕方にはPARK NIGHTとしてトークセッションとライブパフォーマンスを行う3本立てのプログラムである。
- 勉強会では、地元の方々に関わってもらう機会とするためにはどうすればよいか。また、継続的・日常的に運営していく方法などを議論した。
- 勉強会参加者からは、まず船岡山公園や建勲神社のことを知ることが大事ではないか。OPEN PARKの開催日に、船岡山ツアーをしてみてもどうかという提案があった。また、参加対象に広がりがあるような余裕が作れると良い。子どもたち、親子、若者、年配者もみんな来れる場所になると良いという意見も挙がった。
- 地域事業者からは、夏祭りでの取り組みを紹介していただき、「商いの力で地域を盛り上げていきたいという想いが強くなった」という意見をいただいた。また、地域のイベントを一緒に企画開催し、お客さんを引っ張っていける形を作る必要がある。関わった事業者の商いに繋がる形ができるとよいというような意見が挙がった。
- 地域では様々なイベント企画が進行している。それぞれの企画や主体の連動が弱いのではないか。企画が競い合っているようで、地域と連携しているような気がしないという厳しい意見も挙がった。互いの企画が連動していくことで、地域としての一体感もでき、良い連携が取れるのではないか。まずは広報周知協力から始めていければと、具体的な協力・連携の具体案が議論された。
- 勉強会での意見を踏まえ、「地域の人にとって魅力的なものにしなければいけない」という想いがよりいっそう強くなったと主催者は語った。船岡山公園は、多様な主体で運営できるのか試行

実験の場である。しかしながら、地域の方々と密に接続できているかといえば、まだまだ不十分であり、本企画を通して連携を深めていきたいという主催者の想いが感じられた。

- 勉強会での意見を踏まえて、チラシに3月に開催される紫野エリアのイベントも合わせて告知して、地域一体で盛り上げる機運を高めた。
- トークセッションでは、大谷大学の赤澤清孝准教授などこの地域で活動されている方にご出演いただくことでこのエリアの方に興味を持ってもらえる内容とすることを意識した。

○OPEN PARK & PARK NIGHT の開催

- 3/17(日)、小雨が降る肌寒い日であったが、船岡山公園にてOPEN PARK & PARK NIGHT が開催された。「公園は誰のもの？(Who owns the park?)」という問いを真ん中に置いて、「公園をこんな風に使ってみたい」「公園にはこんな可能性もあるのではないかと、未来の公園の使い方をみなさんと話し合い、実験する一日となった。
- 11:00-15:00には公園広場にて、食、物販とエンタメの多数の出店があり、多くの来場客が訪れた。マルシェには紫野周辺エリアの事業者、勉強会に参加された方にも出店いただいた。



OPEN PARKの様子 Photo by 八杉和興



OPEN PARKの様子 Photo by 八杉和興

- 15:30-17:30 には旧公園管理事務所地階にて、「私からはじめる、手づくり公共」というテーマでトークセッションが開かれた。トークセッションでは、「1階づくりはまちづくり」をモットーに活動する、グランドレベル代表取締役の田中元子氏をはじめ、船岡山公園エリアで活躍する事業者としてサーカーコーヒー共同代表の渡邊文氏、大谷大学准教授の赤澤清孝氏、京都市職員の葉山和則氏がゲストに招かれ、主催者である一級建築士事務所 STUDIOMONAKA 共同代表の岡山泰士氏がコーディネータを務めた。
- ゲストからは公園での思い出話から、それぞれの事業や取り組みが紹介され、公園の可能性や船岡山エリアで実践できることなどが語られた。会場には入り切らず、立ち見の参加者が出るほど、熱気に溢れる会場となった。



トークセッションの様子 Photo by 八杉和興



トークセッションの様子 Photo by 八杉和興

- 18:00-18:30 にはパークライブとして、京都を拠点にする音楽家の山本啓氏のライブが開催された。オープンパークでピアノを中心に人の輪ができる光景から制作された「船岡山オープンパーク公式バックグラウンドミュージック」など、数曲が披露された。



パークライブの様子 Photo by 八杉和興

- 参加人数
OPEN PARK・・・約 500 名
トークセッション・・・135 名
パークライブ・・・・・・91 名

○OPEN PARK & PARK NIGHT を終えて

- 老若男女、地域内外から様々な人達が船岡山公園に訪れ、イベントは大盛況のうちに幕を閉じた。
- 主催者は、行政・民間・住民などの垣根を超えて協働し、地域課題に取り組んでいくために、公園というパブリックな場は地域資源としてさらなる活用の余地があると考えている。誰もが「ふらっと訪れ、集い、つながる場」として公園が機能し、「顔の見える関係性」が創出されるなかで、まち全体を考え、地域に貢献するような意識・関係も広がってくる。オープンパークが、大学生も含めた若者

など、世代・分野・立場を超えた接点・つながりの起点とし、公園の日常の風景にしていければ、と語った。

- オープンパークの出店者からも、船岡山公園にこれまでにない可能性を引き出されているという声が聞かれる。はじめて出店した、地元で暮らす主婦は、「ふだん子育てや仕事に追われているので準備に時間があまり避けられないが、少しずつでも挑戦できるのは有り難かった。内気な子供も自分のシールを販売するのが嬉しかったようで、大張り切り、連れて来て良かった。」と感想を述べた。多くのマルシェでの出店を経験している出店者からは、「出店者のブースのなかで、お客さん、運営スタッフが垣根を超えて一緒に雨宿りしているのは、オープンパークの温かさならではだと感じた。」と、オープンパークが単なるイベント・マルシェではない、関係をつくる場になっているという話もあがった。
- トークセッションに出演したサーカスコーヒー・渡邊文さんは、人生初のトークイベントのゲストだった。地域で商いを営む者としての、また、地域で家庭をもつ生活者としての、公園・まちへの率直な考えや思いは、暮らす一人ひとりの視点が地域づくりに大切であることを感じさせるものだった。パークライブで演奏をつとめた山本啓さんは、「年間 100 本くらいやっているなかでも特別なライブとなった。楽しい瞬間と、張り詰めた緊張感が調和する瞬間があり、将来的にやりたかったライブを実現できた。」と、パークナイトが特筆した時間・空間だったと振り返っている。
- はじめて船岡山公園に来園した参加者からは、「京都のひとの豊かさ、新しい一面を知れた」という声も聞かれ、地域の魅力発信、関係人口創出に寄与する側面も感じられる。地元の高齢者のひとは、「公園に希望を感じる。まぶしい。」と語って、飲食を楽しんでいた。
- 今後、FUNAGORA は、京都市の(仮称)Park-UP 事業に向けて、船岡山エリアの住民や事業者との対話を重ね、公園運用の新しい体制の構築を目指す。管理事務所の地階や倉庫などハード面の利活用も試み、オープンパークの機運を、公園の日常につなげていきたいと考えている。
- 今後もこういった取組みを通じて住民や事業者の方をはじめ紫野エリアで活動される皆様の交流と共創が進むことを期待している。